【内神屋（うちこうや）と外神屋（そとこうや）

内神屋（うちこうや）

ここは、銀鏡神社の社家の「家氏神」（いえうじがみ）が祀られていろ「ハナヤ」であるとともに、銀鏡神社の遥拝所（ようはいしょ）※になっている。12月13日に二十八星宿（星の神）を表す「星飾り」が設けられ、その下で、重要神事である「星祭り」が斎行されるが、その時、式一番「星神楽」が奉納される。また、14日の「神迎え」で各鎮座地からお迎えした境内外末社の「土地神（面さま）」を、神楽が終わるまでの間、安置する特別な場所になる。神楽の衣装を着けた祝子が出番を待つのも、この場所。

なお、星飾りは翌年の大祭まで取り外さずに付けておくことになっている。

※　昔からこの地方では、屋敷の離れにある神さまを祀る社を「ハナヤ」と呼んでいまする。

外神屋（そとこうや）

内神屋に続く、斎場を外神屋という。

外神屋の構成は、椎の枝葉でこしらえた「山（やま）」、山と一体化した本迦（ほんしめ）、その前方の祭壇、空中に吊るした天（あま）、地面に長方形に敷いたむしろ、その四方に椎の木を立て四方に注連縄（しめなわ）を張り巡らして、様々な形の「紙垂（しで）」をとり付けた「結界」から成る。

外神屋は、清浄な斎場で「神迎え」等の神事を行い、神楽を奉納する場所である。本迦には、神事により天照大神（アマテラスオオミカミ）をはじめとした天神地祇（てんしんちぎ）や八百万（やおよろず）の神々が御降臨される。

本締めの頂上に取りつける「三皇幣（さんこうべい）」と、その直下に設ける「雲（くも）」が陽光に照らされ風にはためく様子は、八百万の神々の存在を感じさせてくれる情景でもある。祭壇には「御贄（おにえ）」と言われる「猪頭（イノシシの頭）」が供えられ、その前で夜を徹して神楽を舞う。

※雲：三皇幣の直下に取りつけた長さ約４ｍ幅約０.４ｍの赤い布（両端に１対の扇子と五色の紙垂を付ける）

宮崎県ひなたの文化活動推進事業　助成：アーツカウンシルみやざき　後援：宮崎県

※三皇幣：造化三神（ぞうかさんしん。初めて天と地ができた時に高天原に成りました三柱の神）である天之御中主尊（あめのみなかぬしのみこと）、高皇産霊尊（たかみむすびのみこと）、神皇産霊尊（かむみむすびのみこと）に奉る御幣であるので、三皇幣という。大神幣（だいじんべい）3本からなり、その幣串の根元を交差して立てる。3本の幣串には太陽を表す金色の「日」（ひ）が取りつけてある。中央の御幣（金色）は天之御中主尊、その右側の御幣（赤色）は高皇産霊尊、左側の御幣（青色）は神皇産霊尊に奉る。

※やま：椎（しい）の枝葉で作った大形の柴垣状構造物。多くの勧請幣（かんじょうべい。御幣の一種）を刺し立てて、天照大御神を始め天神地祇、八百万の神たちに奉る。本迦（ほんしめ）と一体となっている。

※本迦：勧請幣を刺して天照大神を始め天神地祇（てんしんちぎ）、八百万の神々）を迎えるためのもの。単に迦（しめ）ともいう。昔から、重病等の平癒祈願者が、一生に一度の願かけを行う際に奉納していたもの。近年は氏子が立てているケースが多い。過去には本迦（しめ）が3～5本立ったこともあった。

※「神迎え」（各集落に祀られている土地神（面さま）を銀鏡神社に招くこと。

※天神地祇：天津神（あまつかみ・天の神のこと）と国津神（くにつかみ・地の神のこと）

※天（あま）：天体、宇宙を表す。白界ともいう。

※紙垂（しで）　玉ぐし、注連縄、御幣などにつけてたらす紙。

※結界（けっかい）：　一定の地域・場所に外道・悪魔が入るのを防ぐこと。密教用語。

※御贄（おにえ）：　神に供える捧げもの。

内神屋

外神屋

神楽時例大祭時の外神屋風景

宮崎県ひなたの文化活動推進事業　助成：アーツカウンシルみやざき　後援：宮崎県